

# ヴァルター・グロピウスの「インターナショナル・スタイル」的側面についての考察

著者	福永 堅吾
雑誌名	東京都立産業技術高等専門学校研究紀要
巻	14
ページ	11-14
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1282/00000244/">http://id.nii.ac.jp/1282/00000244/</a>



# ヴァルター・グロピウスの 「インターナショナル・スタイル」的側面についての考察

## Walter Gropius's Aspect of the Relationship to the “International Style”

福永 堅吾<sup>1)</sup>

Kengo Fukunaga

**Abstract:** It is a well-known fact that Walter Gropius, a German architect of the 20th century, is a founder of Bauhaus. But he is also recognized as an important architect, who contributed to defining what the “International Style” architecture is. This essay aims to introduce the “International Exhibition”, in which Gropius was introduced as one of the leading architects at that time, and make it clear in what way Gropius was an “International Style” architect.

**Keywords:** Walter Gropius, the International Style, Bauhaus, modern architecture

### 1. はじめに

ヴァルター・グロピウス(Walter Gropius, 1883-1969)というドイツの建築家は 20 世紀初頭の建築家の中でも重要な人物のひとりとして、これまでに多くの研究がされている。彼の業績の最たるものは、工芸・美術・建築のためのドイツの学校であるバウハウスの創設に携わり、初代校長としてその教育に献身したことであろう。バウハウスの理念は、彫塑や絵画などあらゆる工芸を建築のもとに統合し、また手工芸を、あらゆる創造的行為が出発する源泉として重視することにあった。バウハウスの学生は入学後の予備課程において手工芸の訓練を受け、形や色に関する理論を学んだのち、専門課程において金工や木工の分野に分かれて専門性を高めるという教育を行っていた[1]。バウハウスの試みは革新的だったため、保守層から排除されたり、ナチスからの弾圧に遭うなどして、創設されたヴァイマルからデッサウ、そしてベルリンへと移転を余儀なくされ、ナチスからの圧力にとうとう耐えきれず 1932 年に閉校する。<sup>2)</sup>

グロピウスとバウハウスは切り離して考えることのできない関係にあるが、バウハウスだけが彼の業績のすべてではない。本稿では、「インターナショナル・スタイル」との関係においてグロピウスを考察することを試みる。このスタイルとはそもそものようなもので、それにグロピウスがどのように関わっているのかを検討することで、バウハウスから離れた別の側面から彼についての考察を試みたい。

### 2. International Exhibition

1932 年 2 月 23 日から 3 月 23 日にかけて、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) において展覧会 “Modern Architecture: International Exhibition” が開催された。これは MoMA での最初の建築展であり、当時の世界中の新しい建築動向について啓蒙することを趣旨としていた(以下、当該展覧会について言及する際は「建築展」と記す)。おもな展示内容は、つぎのようなものである。

- ・アメリカ他 15 カ国における建築実例写真の展示
- ・以下の建築家および建築家グループの作品の写真や図面と模型による展示  
フランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright, 1867-1959), W.グロピウス, ル・コルビュジエ(Le Corbusier, 1887-1965), ヤコブス・ヨハネス・ピーター・アウト(Jacobus Johannes Pieter Oud, 1890-1963), ミース・ファン・デル・ローエ(Mies van der Rohe, 1886-1969) 他

<sup>1)</sup> 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科

<sup>2)</sup> バウハウスの歩んだ短い 13 年の歴史については先行研究においてすでに多く言及されている。詳しくはドロステ(2009)[2], ルブファー・ジーゲル(2010)[3]他を参照されたい。また村上(2007)[4]は、イタリアのファシズムが近代建築をその宣伝に利用しようと取り込んだのに対し、なぜナチスがバウハウスを排斥したのかについて考察しており、バウハウスを切り口としてファシズムと建築との関係がはらむ問題を浮き彫りにしている。

建築展の企画に携わったフィリップ・ジョンソン (Philip Johnson, 1906-2005) とヘンリー＝ラッセル・ヒッチコック (Henry-Russell Hitchcock, 1903-87) は、建築展と同年に共著で *The International Style: Architecture Since 1922* (1932) を出版する。同書の中で、「インターナショナル・スタイル」の創設者として、コルビュジエ、ファン・デル・ローエ、アウト、グロピウスの4名を挙げている[5]。ジョンソンとヒッチコックによる前述の著書によれば、1922年以降に国を越えて共通する国際的な建築様式には、(1) 建築をヴォリュームとしてとらえること、(2) 規則性があること、(3) 装飾を排除すること、という3点の特徴があることされており、これが「インターナショナル・スタイル」の定義とされる[6]。

上述の3つの特徴は、建築を取り巻く環境が19世紀末から20世紀初頭にかけて変化したことに起因すると考えられる。つまり、機械による大量生産が可能になり、鉄やコンクリートが開発され、新しいテクノロジーによって建築することができるようになった。新しいテクノロジーによる建築は、合理的で「線」や「面」を組み合わせた構成によるシンプルなデザインの建築物が多く建てられた。こうした建築にまつわる環境の変化は、1920年代から30年代にかけてのヨーロッパが抱えていた住宅不足という問題を解消する手立てとなった一方で、建築展に取り上げられることで、「近代建築」がいかなるものかという定義づけに、「インターナショナル・スタイル」が寄与することにもなった[7]。建築を取り巻く環境の変化は、その時代の建築家たちに建築様式からの離脱を可能にし、新しく誕生する建築は何かしらの統一された様式からも自由になった。例えばこの時代の建築運動ドイツ工作連盟(1907-33)、オランダのデ・ステイル(オランダ、1917-31)などのグループや、フランスのエスプリ・ヌーヴォー(1919-1920年代)などの運動は、それぞれが多種多様な様式による建築を試みたのである。

建築展において紹介された建築家とその作品群は、活躍した国の異なる建築家たちの作品ではあるけれども、「独自の」もので、一貫しており、合理的で、過去のいかなる様式よりも幅広く分布した「形態」の建築である[8]。上述の(1)から(3)が共通項として見出されるが、それぞれの作品が何かしらの規則にのっとって設計されたわけではない作品群である。後述するように、これはグロピウスが提示した「国際建築 (Internationale Architektur)」という概念に通じるものでもある。

佐々木(1995)は建築展の意義について20世紀初頭の欧米の建築動向をアメリカ国内の建築家だけでなく、一般の人々へも広く認知度を高めたこと、そして建築展によって1930年代にナチスを逃れるためにドイツからアメリカに亡命してきた建築家たちを迎え入れる準備が整えられたことにある、と述べる[9]。また鈴木編(2010)は、近代の建築運動の中核をわかりやすく視覚化し、コルビュジエ、ファン・デル・ローエ、グロピウスらに近代建築の巨匠としての確固たる地位を与えた、と指摘している[10]。

### 3. インターナショナル・スタイルとグロピウス

“International Style” という用語は、グロピウスのドイツ語による著書 *Internationale Architektur* (1925) を語源としていると考えられている[11]。「インターナショナル」という言葉と建築とを結びつけて用いたのは、グロピウスが同書においてはじめて試みたことであった[12]。ただし、グロピウスは国際的な「様式」を確立しようとしたのではなく、国境を超えた国々の建築に見出される特色の統一感の提示を試みたのである[13]。むしろ「派」とか「様式」というレッテルは、創造力を束縛する枷と見なして、グロピウスはしりぞけていた[14]。「インターナショナル・スタイル」には、統一された様式はないことは先に触れたが、こうした考え方はグロピウスから直せつ引用されたものかとは定かではないものの、建築展で取り上げられた建築家の中でも彼の主義が尊重されていることからすると、グロピウスが重要な建築家としての地位を占めていた可能性が考えられる(後述)。

建築展で紹介されたグロピウスの作品からいくつか取り上げてみる。まず「ファグス靴工場(1910-14, 図1)」は、作業棟と倉庫棟から構成された作品である。作業棟のガラスのファサードは、つぎに見る「バウハウス・デッサウ校舎(1925-26, 図2)」に通じるデザインで、彼の代表作である「デッサウ校舎」へのつながりを連想させる点では記念碑的な作品と評価されている[15]。「デッサウ校舎」は、何をおいてもそのファサードのカーテンウォールが目を惹く。そしてこの校舎は、「教室棟」と「アトリエ棟」とに分かれ、両者を「管理部棟」がつかないという構造になっており、教室での学習とアトリエでの実践とを1つの学校内で橋渡しするという、バウハウスでの教育の理念を体現したものである。「デッサウ・テルテン集合住宅(1928, 図3)」は、カーテンウォールはないものの、白を基調とし、装飾を排して、シンプルな方形の構造が特徴的で、「デッサウ校舎」に付属する「学生寮(1927)」も同様の造りになっている。

建築展カタログの「歴史的覚書(Historical Note)」において、グロピウスのデザインが1922年に転向した点が注目されている。1922年というのは、グロピウスが新聞社のシカゴ・トリビューン社のための新社屋建設のコンペに応募し、落選した年である。また同カタログの建築家別の作品とその作家の紹介文においても、グロピウスの経歴に触れる中で、1922年に「グロピウスは現代建築への道を再発見した」と述べ、表現主義的傾向から新造形主義的傾向へ方向転換に

ついて言及されている。先述のコンペに応募した社屋のデザインは、オランダの「デ・スタイル」(わけても画家で建築家のテオ・ファン・ドゥースブルフ(1883-1931))のデザインの影響を読み取ることができる[16]。カタログの執筆者であるヒッチコックはグロピウスの経歴について解説する中に、その1922年に関わっていたドイツ・イエナの劇場再建の際、「そのデザインはなお初歩的な、伝統的デザインの単なる単純化でしかなかった。しかし(……)グロピウスはファン・ドゥースブルクの美的探求をさらにつづけて設計を続けていた、と書いている[17]。建築展と同年に出版された先述の *The International Style: Architecture Since 1922* の書名にある“since 1922”とは、まさにグロピウスのデザイン転向の年に重なっている。書名の副題というさりげない場所ではあるが、この数字に重ねたグロピウスに対する意識は、ひょっとしたら大きいのかもしれない。

#### 4. さいごに

20 世紀の建築家として重要な人物の一人とされるグロピウスであるが、彼の史的重要性の一端は、「インターナショナル・スタイル」を定義づけする契機となる建築物を残した点にあるといえる。グロピウスは、1937 年からハーバード大学の教授の職を得て、翌 1938 年からは同大学建築学科長に就任している(1952 年まで)。この建築展がグロピウスのアメリカでの今後の活動をするにあたり、彼の最初の受け皿として機能し、彼の認知度を高めることに少なからず貢献したと考えられる。ところで、すでに述べたように、「インターナショナル・スタイル」は統一された特定の様式を持たず、それはグロピウスが何かしらの流派であったりスタイルであったりを持つことに否定する態度をとっていたことと矛盾しない。しかし、「インターナショナル・スタイル」というひとつの「スタイル」であるかのような名称で普及してしまったことは、皮肉的でもあり[18]、名が体を表していない結果となった。また、建築展を契機として認知されはじめたインターナショナル・スタイルは、その反動として地域性を重視したリージョナルな建築を生み出し[19]、ある種の多様性を建築の世界にもたらした結果にもつながっていることから、建築史において欠かすことのできない存在であったといえよう。

20 世紀初頭に、時代の建築の方向について舵を取る役割を担った建築家の功績を、バウハウスという範疇にとどめておくのだけでは、グロピウスの全貌を掌握するには足りない。彼の知名度が高まった建築展のタイトルにあるように、彼の“international”な活躍の軌跡を今後も継続して辿ってゆきたい。



図 1. ファグス靴工場



図 2. バウハウス・デッサウ校舎

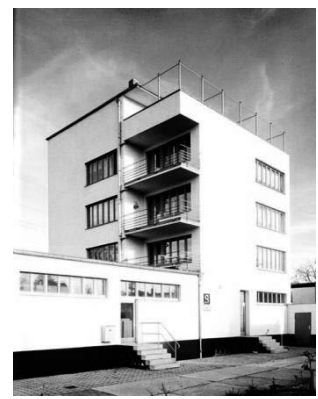


図 3. デッサウ・テルテン集合住宅

#### 参考文献

- [1] 藤岡洋保：『近代建築史』，森北出版株式会社，p. 39，2011
- [2] ドロステ，マグダレーナ：『バウハウス 1919-1933』，タッシェン・ジャパン，2009
- [3] ルプファー，ギルベルト・ジーゲル，パウル：『グロピウス』，タッシェン・ジャパン，2010
- [4] 村上俊介：「バウハウスにおける反・反近代の意味」 桑野弘隆・山家歩・天島一郎編『1930 年代・回帰か終焉か』，社会評論社，pp. 200-229，2007
- [5] Hitchcock, H.R., & Johnson, P., *The International Style*, Norton, p. 44, 1995
- [6] Ibid, pp. 55-89

- [7] 村上心・元岡展久：「インターナショナル・スタイル・ハウジングの歴史的評価に関する研究」『椋山女学園大学研究論集自然科学篇』（34），pp. 93-103, 2003
- [8] Hitchcock, H.R., & Johnson, P., op. cit., p.27
- [9] 佐々木宏：『「インターナショナル・スタイル」の研究』，相模書房，p. 88, 1995
- [10] 鈴木博之編：『近代建築史(部分カラー版)』，市ヶ谷出版社，pp. 58-59, 2010
- [11] Ibid, p. 58
- [12] 佐々木，op. cit., p. 187
- [13] グロピウス，ヴァルター：『国際建築』 貞包博幸訳，バウハウス叢書 1，中央公論美術出版，p. 7, 1995
- [14] ゲイ，ピーター：『芸術を生みだすもの』 川西進他訳，ミネルヴァ書房，p. 150, 1980
- [15] 村上俊介：「バウハウス創設者ヴァルター・グロピウスドイツ・イギリス・アメリカの足跡ー」『専修大学人文科学研究所月報』（246），pp. 15-39, 2010
- [16] Johnson, P. et al., *Modern Architecture: International Exhibition*. Museum of Modern Art, p. 33, 1932
- [17] Ibid, p. 58
- [18] 佐々木，op. cit., p. 191
- [19] 八束はじめ：「インターナショナリズム vs リージョナリズム」『建築の 20 世紀』，デルファイ研究所，pp. 167-189, 1998

#### 図版出典

- 図 1 ルプファー，ギルベルト・ジーゲル，パウル：『グロピウス』，タッシェン・ジャパン，p. 16, 2010
- 図 2 筆者撮影(2014 年)
- 図 3 ルプファー・ジーゲル，op. cit., p. 44

※本稿は「日英言語文化学会第 63 回定例研究会」（2017 年 12 月 9 日，於：明治大学駿河キャンパス）における発表内容に加筆修正して執筆したものである。